

自然教材としての都井岬 ～家畜をやめた現代の野生化ウマ～

串間市・文化財専門員 秋田 優

■岬馬とは？（再野生化馬群）

都井岬は、元禄 10 年（1697 年）に軍馬の生産牧場として始まったが、開設当初から粗放な飼養法によって雄雌を周年自由放牧・自然繁殖させ、子馬の生産が行われていた。その当時から続く在来馬が、ほとんど品種改良されずに野生化したものが岬馬であり、遺伝子資源としても重要な動物であって、馬としては唯一の国指定天然記念物である。

現在は、ウマ科動物の野生に近い社会を、大変容易に観察できる貴重なフィールドとなっており、研究対象としてだけでなく、観光客向けのエコツアー商品としての活用や、環境教育の教材としての利用も試みられている。

■岬馬の社会と都井岬の自然環境

岬馬は、面積約 550ha（草地 100ha・森林 450ha）に、現在 80 頭が生息している*。繁殖シーズンである春には、雄 1 頭に対して雌 2～3 頭からなるハーレム群が形成され、毎年 10～15 頭の子馬が生まれる。この時期、ハーレム雄同士で闘争行動が頻繁に観察されるが、雄馬の闘争行動には一連の様式があり、特にお互いが排糞をして糞溜まりを形成する行動は非常に興味深い。

同じハーレム群を構成する雌個体間には、月齢と有意な相関のある順位性がみられ、採食や飲水など、危険を伴わない日常生活の移動に際しては、年齢の高い雌個体が先導する傾向にあり、その場合、雄は専ら群の後ろから追従して遅れた個体の移動を促す。

繁殖期間中、ハーレム雄は、自身のハーレム群に所属する雌の排泄物を確認すると、尿をかけてマーキングを行う。雄の尿には特有のクレゾール臭があり、雌の排泄物中に含まれる繁殖に関する匂いの情報を、隠蔽するための行動であると考えられている。

都井岬の草地は、岬馬によって維持されてきた天然のノシバ草地である。そこには、オキナグサやノヒメユリ、ムラサキセンブリなど草原性の絶滅危惧種が豊富に存在する。また、馬が排泄する馬フンには、植物の種子が芽生え、糞生菌が発生し、糞虫も集まる。人為的な草地改良がほとんどされずに、数百年も維持されてきた都井岬の自然環境は、まさに生態系の縮図そのものである。

（*2011 年 12 月 5 日現在）

■現代における都井岬の存在価値を考える

野生化馬の研究フィールドとして歴史のある都井岬では、古くから個体識別がなされ、個体表と家系図は半世紀近い連続データがある。これを背景とした研究計画や教材活用、観光ガイドが出来ることは、大きな魅力である。また、都井岬は観光地でもあり、岬馬が良い意味で人慣れしている。野生動物のように逃げることがなく、餌も与えないために飼育動物のようにヒトに関心を示さない。観察者の存在が、行動に影響を与えにくい、という特徴は、観察対象として貴重である。また、都井岬は草原であるため観察が容易で、遠足のように気軽な装備で観察ができる。岬馬を中心とした、動植物の営みが観察できる都井岬は、その環境の全てが、設備費不要の『箱物でない自然博物館』と言えるだろう。